

過去を 手放せ ない 生物

人間

## 《概要》

まずは時間の本質から見ていきましょう。『現在』というものは 今 です。この 今 は、つかむことができずつねに、つねに私達と一緒に未来に向かって移動していきます。『未来』とは現在 今 から見て次にやって来る時間です。この『未来』にはこれから実現されるはずの世界状態と、まだ実現されていない世界状態に身構えている現在の状態という二つの意味があります。『時間の速さ』とは時間の流れる速さのことです。私達人間は時の流れが速くなったり、遅くなったりするように感じます。でも時間自体に速度はないのです。

次に過去の本質を見ていきましょう。物事は何故『過去化』するのでしょうか。それはそれは実際のところ私達は過去しか知らないからです。そして、ここには「認識」(世界に対する正しい知識)が私達に絡んできます。過去は『保存』そのものはされていません。過去という痕跡が保存されているのです。過去と『記憶』とはつながりがあります。何故なら過去の痕跡は記憶のある脳に保存されています。記憶=痕跡といっても過言ではありません。

では過去の本質を知って私達はこれからどうするのでしょうか。過去自体は『無意味』です。ただ かつてあった という感情、すなわち 過ぎ去った感情 と思えばいいのです。過去は今『ここに』あります。現在と過去が、まったく異なったあり方をする二つの時として一挙に身を現すからです。それでは過去から『出発』しましょう。過去は現在から発生しています。だから現在の発生の場所でもある過去から出発できるのです。

## 《目次》

### 《概要》

### 《目次》

### 《はじめに》

#### 第1章 【時間の本質】

- ・現在という時
- ・未来という時
- ・時間の速さ

#### 第2章 【過去とは一体】

- ・何故過去化するのか
- ・過去はどこにあるのか
- ・過去と記憶

#### 第3章 【過去を知って】

- ・過去自体は無意味
- ・過去は今ここに
- ・過去から出発

### 《おわりに》

### 《文献参考図書》

### 《あとがき》

## 《はじめに》

私達は、常日頃か過去という過ぎ去った時間にとらわれて毎日を送っているように思います。昔あったつらい出来事を思い出しては、悲しみ、怒り、後悔をしています。また、過去におびえながら生活をしている人もたくさんいるはずですが、何故そのように過去を気にするのでしょうか？それはきっと、時間や過去がどういう物なのかをよく(まったく)知らないからです。死後の世界を怖がるように、私達は知らない物や、よく分かっていない物に対しては恐れや怯えがあります。では、その私達をとらえて放さない過去・時間について、じっくり考えてみましょう。

## 第1章 【時間の本質】

### ・現在という時

時間の中で、私達が一番大切なのは、過去でも未来でもなく『今』すなわち現在です。『今』とはきわめて重要な時であるのに、カレンダー や時計からは読み取る事ができません。つまり『今』とは静止しているのではなく、未来に向かって移動しているのです。同じに私達も未来に向かって移動します。私達は『今』から逃れられない、永遠に『今』なのです。もしここにタイムマシンがあったとします。そのタイムマシンにのって、江戸時代にいった貴方は「今、江戸時代に着いた」と言うでしょう。過去に行ったのに『今』なんです。しかし、『今』という言葉の意味は決して「話者が『今』と語る時と同時」ではありません。どういう事かというと、例えば電話で、幼い子に、「〇〇ちゃん、今何しているの？」と聞くと「お電話してるの」と言うでしょう。しかし、普通大人はこうは言いません。「今、原稿の締切りでおおわらわだよ」とか「今、家内と大喧嘩したところでね」とか答えます。でも実際『今』している事は幼い子が言う通り「電話をしている」という行為なのです。このように相手が了解していない事を答えます。それに『今』を語り出す時、私達は「今ではない時」を「地」としてそこに浮かび上がらせるように『今』という言葉を使用します。例えば、「今何時？」と聞くとします。しかしよく考えてみて下さい。「今何時？」と聞いた『今』という時間は、相手が時間を見るときにはすでに『今』ではなく過去になっています。しかし私達は、それを認知して「今何時？」と聞くのです。概念としての『今』を了解するには、とりわけ過去における『今』に身をおいて、「そこから」すべての時間関係を理解できなければなりません。このとき(過去形の文章の中で『今』という言葉を理解しているとき)、注目すべきことに『今』とはそれに対応するいかなる端的な眼前の知覚も体感も欠いた完全に概念＝言語なのです。それにもかかわらず、私達はきわめて自然にその意味が分かります。端的な実感に支えられずとも『今』が分かる事、それが『今』という言葉を知り使えるということなのです。例えば「今、撃て」と言えるチンパンジ が出現したとします(この出現はありえます)。しかし「『今、撃て』とさっき言ったじゃないか」と語れるチンパンジ となると、その出現が難しくなります。しかし人間の子どもは五歳になれば、こうした過去における『今』の用法を完全に習得してしまうのです。いくつかの例を挙げましたが、『今』というのはチルチルとミチルが探し求めているどこにもいない青い鳥のようなものです。「あっ、あそこに青い鳥が！」けど捕らえてみると網の中で、青い鳥は灰色に変わってしまいます。『今』の時間はどこだどこだと探し求めているうち者が、「あった！」と、捕らえてみれば、ことごとく過去にされた(灰色)の時間ばかりなのです。

### ・未来という時

未来とは今(現在)から見て次にやって来る時間です。一般に二つの異なった意味で『未来』という言葉が使われている事に注意しなければなりません。その一つは、これから実現されるはずの心の状態を含んだ世界状態であり、もう一つはそうしたまままだ実現されていない世界状態に身構える現在の心の状態です。例えば、前者は明日執行されるはずの死刑それ自体であり、後者はそれに対して悶々と身構えている死刑囚人の心の状態です。一見して私達は、『未来』という言葉が前者の意味で使用しているようですが、そうではなく後者の意味でも使用しているから、議論がこんがらがってくるのです。なるほど「明日」という言葉は明日になれば現在となってしまう、今日においてこそ未来なのですから、今日それについて知っていることが未来のような気がしてきます。しかも、明日そのものは今日いかにしても観察できませんから、今日それについて見えたり、聞こえたり、触れたりするのはなく、ひとえに感じ・考えている事が未来のようであります。こうして明日に処刑を控えている死刑囚は未来に対して怯えているといいたくなるのです。

私達は実現した状態から振り返って、実現されなかった状態を思い起こします。そして、実現されなかった時(すなわち過去)において、実現されることになる時(すなわちその過去における未来)を了解する。つまり、ある過去の時点から見ますと、その後実現されることは全てその過去における「未来だった」こととなります。そしてその過去系列の最先端に「現実」が位置しています。現在とはあらゆる「未来だった」時でもあるのです。本当はこれだけなのですが、さらに私達はこの関係を完全な不在である未来に延ばし、現実と未来との間に幻想の関係を作り出してしまいます。いわば、未来の出来事を舞台の袖で呼吸を整え出番を待っている役者のようなものとみなし、それがやがて舞台の中央に踊り出るように「来る」という(誤った)イメージを形成してしまうのです。実は、未来が「来る」というイメージは、過去が「行った」というイメージに重ね合わせて登場してきます。未来が「来る」という表現でさえその源は「未来であった」という過去完了の中に潜んできます。それを現実と未来との間に不当に延ばして分かったつもりになっているだけなのです。

### ・時間の速さ

「時が流れる」というには一体どんなんでしょう？私達はよくそういう(時が流れる)表現をします。時間が経つのが遅いとか速いとかも言います。「時の流れ」と同様に「時の中断」という表現もあります。もし時が止まったらどうでしょう？動かす人もいなくて、永遠に止まったまま、まるでモモのようになるのでしょうか。もし今これを書いている、「こ」と「れ」の間に、十万年という時の中断があったとすると確かに面白いかもしれませんが。しかし、そもそも時間が中断してしまうのであれば、その中断の長さは計ること事はできません。ということは、時間は絶対に中断しないということなのではないでしょうか？いいえ、そもそも「中断する」とも「しない」とも言えないと考えるべきでしょう。「中断」は始めから終わりまでのじかんの間隔を持つものとして考えられていますから、それを時間そのものに適用することはカテゴリ・ミステックになります。つまり「時間が停電する」は無意味な日本語なのです。この節のはじめに書いた「時間の速さ」についてです。時間自体に速度があるわけではない事は誰でも、少し考えれば分かるでしょう。時間に速度があるなら、それはも

う一つの時間上を走る物体であることになります。では、時間そのものではなくて、十年前の旅行や、数時間前の授業のような時間上の出来事に速度があるのでしょうか？いいえ、これはおかしい表現です。出来事によって速度の違いがあり、例えば十年前の出来事Aが三年前の出来事Bより「速く」経過するなら、AはBにだんだん近ずき、そしていつか追き去るはずですが、けっしてそんな事はありません。一日のうち私達は実に多くの出来事に遭遇し、少なからぬ出来事を自ら実現します。退屈きわまりまい授業はじつに「のろのろ」経過、その後の休み時間はアツという間に過ぎ去ったように思います。では、授業における時間は休み時間における時間より進行が「遅い」のでしょうか。この場合時間の速度はどのように測定されるのかというと、問い詰めますと、全てが疑問だらけです。たとえ、全ての出来事が同じ速度を持ったところで、出来事の速度という意味は判断しません。三時間にも感じられる授業の速度とは一体何なんのでしょうか。しかし、こうした理詰めの考察で事が片づかないのは、時間の速度という表現が、いかにも自然に私達の口をついて出てくるからです。「えっ、あれはもう五年も前の事？時が経つのは速い(早い)ものだね！」という感嘆がごく自然に響き、お互いにその意味するところがよく分かるからです。その限り、そこにはまったくナンセンスとは言えない時間完了の根っこがあると考えてよいでしょう。

## 第二章 【過去とは一体】

### ・なぜ過去化するのか

なぜ現在や未来だけではなく過去に時間の有り方を統一しようとするのでしょうか？この問いには簡単に答えられます。実際のところ私達は過去しか知らないからです。つまり、ここで実は「認識」(世界に対する正しい知識)を哲学の中心課題するという私達の姿勢が、絡んできます。「認識」が問題である限り、現実の出来事は過去にしか発生していません。未来に対する予感とか思惑とか予言を認識としてみなしませし、天気予報や日食、もっと分かりやすいところでは、来年の経済成長率や失業率などは、ただの過去のデータを適当な変更を加えて 未来に延ばしたでけのもので、決して未来自体の認識ではありません。そして、現在何が生じているかすら、現在渦中にあるは、ただちには「認識」とはありえません。誰でも夢を見ますが、夢を見ている「あいだ」はそれが夢か現実か決定できません。醒めた後にはじめて決まるのです。幻覚も幻想も妄想も「そのとき」 たとえ変だなど思っても それが原過去であるか否かは、やはり後で決まるのです。個々の事例をとれば疑い様のないことはことは数々あります。今私は、ワ プロのキ をたたいていますがこれは夢ではないでしょう。ブラインドごしの暗い夜空と、町々の夜景が見え、エアコンの音が聞こえますが、これも幻覚ではないでしょう・・・つまり、現在私達は覚醒しており、知覚したことはそのとおりに存在していると信じていますが、こうした事をいくら挙げても反論になりません。なぜなら、夢の中でも私達は同じように世界に対する正しい知識を持っていると信じており、また 幻覚はほとんど体験した事はありませんが 見誤り、聞き違い、思い違い、錯誤、幻想など数限りなくあるからです。ですから、正確に言えば現在の信念はそのまま認識になりうることも、なりえないことあり、それを整理するのはあくまでも「あとで」のことなどです。

### ・過去はどこにあるのか

過去自体は普通の状態(すなわち牛乳が冷蔵庫に保存されているようには)まったく保存されていません。保存されているのはせいぜいその「痕跡」です。一方で、誰も痕跡に戻ろうというわけではありません。痕跡は戻らなくても、今現在存在しています。そして他方、過去自体は一滴も保存されていないにですから、どうあがいてもそこへはタイムトラベルできないはずで、とはいえ、独特の仕方では私達は過去はタイムトラベルしているのです。それは、他ならぬ「想起」という仕方でのトラベルです。少なくとも自分の直接体験した過去をアリアリと想起できます。幼いころ母親と一緒に見た夕日が鮮やかに「見える」気さえます。母親が歌ってくれた子守唄が真近に「聞こえる」気さえます。つまり、想起という仕方において行き着いた過去は、知覚的に見えたり聞こえたり触れたりはず、ただそう「思われる」というかたちで出現するのです。タイムトラベルが私達の夢を膨らませるのは、むしろ私達日々想起という現象の不思議さにひっかかっているからではないでしょうか。現在、過去の出来事を想起できることは大層不思議なことですが、なぜかできるのです。それなら、さらに一步を進めて、その出来事が起こった現場に実際戻ることもできるのでは、という熱い期待を抱いてしまうのではないのでしょうか。

ここで話は少し変わります。私は今パソコンをうっています。そのパソコンを私が5メートル先に見ているときも、パソコン自体が脳の中に入ってくるのではなく、その「像」が入ってくるわけです。こうした説明はいかにも上手くいっているように見えます。二〇〇〇年ほど前に、すでにデモクリトスやルクレチウスは「エイドラ(eidola)」の薄片物体から剥がれて眼の中に飛び込んでくるのだ、と説明しました。外界の物体その物が眼の中に飛び込んでくるわけがありません。とすると、外界の物体の光景を伝える「何ものか」が眼の中に入るのだというわけです。現代の知覚論もまったく同じ構図のうちにあり、対象からの光の束(フォントでも電磁波でもいいのですが)が、瞳孔に入り電氣的エネルギーに変換され視神経を刺激し脳のある場所Gまで至る、という道筋を描きます。エイラドが光やエネルギーに変わっただけです。しかし、こうした説明はGにおいてなぜあんなに大きな五メートルも先にあるパソコンが見えるのか、一番知りたいことを教えてくれません。

### ・過去と記憶

さらに最近の心理学では「アイコンニック・メモリ」ということが盛んに言われています。無意味綴りなどを短時間のうちに見せて、報告されるといふ単純な実験をしますと、多くの被験者が「もっと見えたはずなのだが言葉で言えない」といふ体験を報告しています。この現象に注目して、被験者は自分が意識しているよりもはるかに多くの情報を受けとり識別していることを示す実験が重ねられています。これにとどまらず、脳の<ウチ>に過去の痕跡が蓄積されているという考えは、さなざまな自然な観察によって補強されています。まず「残像現象」は、過去が蓄積されるというイメージの火付け役のようです。ある光景を一瞬見てからすぐ眼を閉じその光景を思い出そうとしますと、あたかも写真でその光景を撮ったかのようにアリアリと「目に浮かびます」。想起を過去の「像」を疑似的に「見る」ようなものとみなす(誤った)イメージの形成は、このあたりに起因するのかもしれませんが。また、ウィリアム・ジョムズの有名な「見かけの現在(specious present)」という概念は、心理学の実験に沿った現実の概念です。心理学には「今見たことを報告しな

い」というたぐいの実験がたくさんあります。その場合、現在の知覚を調べているようですが、実は近い過去の想起を調べているのです。「保持」している近い過去こそ「現在」なのです。交通事故などで少し経ったことの記憶はしっかりしているのに、その直後の記憶だけ欠如していることはよくあることです。この現象をとらえて、心理・生理学者は、記憶の「沈殿」にある程度の時間がかかり、交通事故などのショックによりその沈殿過程が妨害されたためです。この事例も、記憶が脳に「蓄積される」という見解を補強しています。

### 第3章 【過去を知って】

#### ・過去自体は無意味

ラッセルは「心の分析」で<理論的に言えば、記憶されているできごとが実際には起こっていないとも、そのような記憶の信念は生じうる。そもそも過去がまったく存在していなくとも、記憶の信念は生じうるのである。世界が五分前に、まさにそうあったとおりの状態で、そして人々もまったく非現実の過去を『覚えている』状態で突然存在し始めたのだという仮説を立てても、この仮説は理論的に不可能ではない。異なった時点のできごとの間にはなんら理論的必然的關係はありはしない。それゆえ、現在および未来において起こるいかなることも、世界が五分前から始まったという仮説を反証しえない。かくして、過去についての知識と呼ばれるものの成立は過去とは論理的に独立であり、全面的に現在の内容は、理論的には、たとえ過去が存在しなかったとしても、いまわれわれが手にしているとおりの内容でありうるだろう。>と言いました。ラッセルはこう語ることによって、私達の知識から独立にカント 物自体 のような過去を積極的に承認しているわけではありません。むしろ、ラッセルの力点は過去に関する知識から過去自体へのいかなる通路もないということにおかれ、このことによって過去自体の無意味性を指摘することにあります。私達の知識レベルでつじつまが合っていさえすれば、この知識から独立の過去自体は何であってもいい、つまり極端な場合ほとんどなくとも(五分前)一向にかまわないのです。少し話は変わりますが、想起はさまざまな心理作用の外に前提する必要はありません。ただ想起には かつてあった) という感情すなわち「過ぎ去った(pastness)という感情」が伴えばよいのです。そして、それが夢や錯覚ではなく かつて実際にあったこと を想起している場合には、さらに「慣れ親しんでいる(familiarity)という感情」が伴えばよいのです。こうして、ラッセルは徹底的に「過去自体」を追放し、想起とそれに伴う「感情」によって全ておきかえることが可能だ、と言いたいのです。

#### ・過去は今ここに

たしかに、現在の痛みや暑さもすでに言葉によって表現されているかぎり、不在の痛みや暑さの了解を経由しています。つまり、「痛かった」という過去形や「暑いだろうなあ」という推量形に裏打ちされて発せられています。今の文法は徹底的に概念的なものであり、それはすでに 今 でない時である過去との関係を含んでいます。つまり、今 与えられている直接的な刺激や印象ですら、それらを「痛い」とか「暑い」という言葉によって表現した途端、過去との潜在的関係がそこに開かれます。しかし、このことは 今 端的に知覚としての「痛み」や「暑さ」が与えられていないことを意味しません。端的な知覚が一切与

えられていないのだとすれば、私は想起することもできないでしょう。つまり、今がいかに概念的なものであると、今 端的な知覚が私に与えられており、その場で私が今想起しているということがなければなりません。全ての考察はやはり「ここから」出発しなければならぬのです。知覚対象のみならず想起対象も、今ここに立ち現れています。私が今 夜風にあたりながら昼間の暑さを想起しているとしますと、その「暑さ」もやはり今ここに立ち現れているのです。その場合、今 感じている「涼しさ」と想起によって現れている昼間の「暑さ」とのあり方はまったく違うものです。なにしろ、暑かったことを想起しているのに今 は全然暑くないのですから。それにもかかわらず「暑かった」という言葉を発することによって、私は「涼しさ」ではなくほかならぬ「暑さ」を表現したいのですから。つまり、「暑さ」は今ここに知覚としてではなくただ「暑かった」という言葉の意味として立ち現れているのです。こうした直接的な知覚の現場において、現在と過去が、まったく異なったあり方をする二つの時として一挙に身を現します。物理的対象としては不在ですが、意味的対象としては現在しているのです。

#### ・過去から出発

まず、過去の発生してくる現場をとらえてみましょう。いつもいつも現在であるという根本的理解に加えて過去はどのように発生してくるのか、こう問うたとたん私達はもう岩のような難問の前に立っています。どんなに力んでも現在から過去は一滴も絞り出すことはできませんから、ここで行き止まりなわけです。現在から出発しますと、はっきりここで終わり、後は全て屁理屈です。しかし、がっかりすることはありません。もう一つの道が開けています。過去から出発する道です。現在から出発すると、どんなにあがいても過去へ向かう通路は見出せなかったのに、過去から出発すると不思議な事に現在への扉も開かれます。私は何も深遠なことを語っているわけではありません。ある出来事が過去であるという理解は、その判断なり作用なりをしている時が現在であるという理解を含んでいるのです。「昨日は寒かった」という判断をしている時は今日なのです。ですから、今日と言う日を生きていない者(昨晚死んでしまった者)は「昨日は寒かった」という判断を下すことはできません。過去形を語ることは、その語るばが現在であるという理解が伴っているのです。これに対してもうおわかりかと思いますが 現在形を使う場合は「なんて寒いんだ」と身を震わしている時もまた現在ですから、ここには過去は一滴も含まれておらず「ここから」過去へ至る道はどんなに目を凝らしても見出せないというわけです。(この場合でも「今は過去ではない」という理解がやはりいわば「地」として取り囲んでいる、という見解もわからないことはありません。それもまた過去から出発したからこそいえるのだということです。)

#### 《おわりに》

ここまで私は時間のこと(過去,未来,現在,etc)について述べてきました。でもこれは時間というものに対してのほんの一部でしかありません。ほんの一部しか理解していないのに、私は、過去に対する負の感情が和らいだ気がします。何故なら、先ほどの章でも書きましたが、過去とは物事が終わってしまうだけでなく、同時に始まる場所でもあるからです。だから私はこの過去という物(すなわち出発点)をしっかりと見つめてこれからも生きていきたいと思



います。このレポートによって、過去にケリをつけること、過去を整理することができる人が一人でもいてくれればうれしいです。

#### 《文献参考図書》

- ・「時間」を哲学する 作：中嶋 義道 [講談社現代新書]
- ・哲学の謎 作：野矢 茂樹 [講談社現代新書]
- ・雑学万歳！！ [ホムペジ]
- ・editor's note [ホムペジ]

#### 《あとがき》

「終わった～」って、感じです。このレポートを書き始めて、この《あとがき》が書けることが夢のようです。書き始めの頃はテーマの難しさに戸惑い、何回もテーマを変えようと思いました。でも他のテーマには特に書きたい事があるわけでもなく、いまいちでした。そんなことを言っている間に、日はどんどん過ぎていきます。資料はまったく集まらないし、周りはどんどん進んでいきます。相変わらず新書は難しいので、新書の内容を理解するのにほとんどの時間を費やしてしまったという感じです。アンケートをとろうかと何回も思いましたが、質問の内容があまりにも抽象的すぎて、言葉で表すことすらできなくて……。最後の数週間ははっきり言ってかなり悲惨な状態でした。でも、なんやかんや言っても、今ここに十枚弱のレポートを完成させることができました。《文献参考図書》を書き終わったとき一番に『諦めなくて、本当に良かった』と思いました。諦めたらそこで終わりだけど、諦めなかったからこのレポートが完成したんだと、当たり前な事を改めて思いました。今回のこの<考えるレポート>は私にとっても良い経験の一つを与えてくれたように思います。

2001年 12月18日 火曜日